

主 題：蒔いた種は自分で刈り取る

聖書箇所：ローマ人への手紙 2章6－16節

私たちは「神のさばき」ということを学んでいます。「罪人は必ずさばかれる」ということをみことばによって教えられました。罪人の問題は、神に対して逆らい続けているだけでなく、神が一方的なご慈愛によって備えてくださった罪の救いを自らの意志で拒み続けているところにあるとパウロは教えました。主イエス・キリストがご自身のいのちを十字架で捧げてくださり、そのいのちと引き換えに備えてくださった私たちに最も必要な救いを軽蔑していると。それが証拠に、神の恵みを聞いても、救いのメッセージを聞いても、その罪の道を捨てて神の道を選ばない、悲しいことに、神よりも罪を愛し続けている、だから、神のみことばである聖書は、神は罪人に対してあなたにはさばきが約束されていると警告するのです。詩篇の著者はこのように言います。「**確かに、主は来られる。確かに、地をさばくために来られる。主は、義をもって世界をさばき、その真実をもって国々の民をさばかれる。**」（96：13）と。私たちが繰り返し見て来たように、神は私たちにさばきがあるということを教え、そのことを繰り返し警告し続けています。前回見たように、その神のさばきというのは人間のさばきとは違って、正しいものである、真理に基づいたものです。なぜなら、神は私たち人間のすべてのことをご存じで、私たちの心の隠れた部分まですべて見ておられるから、その方がおさばきになるときそのさばきは正しいさばきなのです。そして、今日、私たちは6節から「神の正しい審判」について、パウロが与えてくれるより詳しい説明を見て行きます。その「正しい審判」とはどういうものか、どのような審判を神は警告しておられるのか、そのことを見て行きます。

☆神の正しい審判とは？

1. それぞれの行ないに応じたさばき 6－10節
2. 神の審判は常に公平である 11－16節

1. それぞれの行ないに応じたさばき 6－10節

6節「**神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。**」、この6節では二つのことを私たちに教えています。

1) さばきの確実性

この「さばき」は必ず起こるといふその確実性です。さばきは必ずやって来るということのパウロはここで繰り返し教えようとするのです。起こるかどうかわからないという、そういういい加減なものではなくて、必ず神の審判は下るのだということを保証するのです。「**報いをお与えになります。**」というのは原語では一つの単語です。神が必ずこのようなことを未来においてなされると確約するのです。しかも、「**報い**」と記されていることは、一人ひとりがしたことの結果として、自分自身が受け取るものです。人のせいにはできないのです。自分がしたことは自分が刈り取らなければいけない、みことばが教えるように、自分が蒔いた種は自分が刈り取らなければいけない、その責任は自分にあるということです。箴言24：12には「**もしあなたが、「私たちはそのことを知らなかった。」と言っても、人の心を評価する方は、それを見抜いておられないだろうか。あなたのたましいを見守る方は、それを知らないだろうか。この方はおのおの、人の行ないに応じて報いないだろうか。**」とあります。

罪人に対する最後の審判と言われているそのさばきの様子が黙示録の中に記されています。20章ですが、一人ひとりの罪人が例外なく、神の赦しを受けなかったすべての人が、神の前に立ってさばきを受ける姿が記されています。11－12節にこのようにあります。「**また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。：12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行ないに応じてさばかれた。**」と。ですから、みことばは明らかにそれぞれが自分のしたことに応じて神からの審判を受けるということを記しているのです。このさばきはクリスチャンが受けるさばきではなく、イエスを信じていなかった人たち、罪の赦し得ていなかった人たちに対する警告です。自分の行ないに応じてさばかれること、行ないに応じた「**報い**」です。

2) さばきの普遍性

もう一つ、パウロが教えているのはその「普遍性」です。すべての人に例外なく必ず起こることだと言うのです。ですから、「**神は、ひとりひとりに**」と言いました。例外なく、すべての人に必ず神のさばきがあるというこ

とです。すべての罪人はこのさばきを免れることはありません。そうすると、このみことばを見ると、私たちは死後に関するさまざまな質問に答えを見出します。どのような質問かという、—皆さんもお聞きになったことがあるし、ご自分でもお考えになったことがあるかもしれません—「人は死んだ後どうなるのか?」と、ある人はこう言います「眠ってしまう」と。でも、聖書はそのように言っていない。聖書は答えをくれます。眠るのではなく、彼らはよみがえって神の前で自分が行なった罪の審判を受けるのです。その後、永遠のさばきに服するのです。また、ある人はこう言うかもしれません。「巧妙にこの世のさばきを免れた人はどうなるのか?」と。確かに、見事に法の目をかいくぐってさばきを免れた人がいます。罪を犯しているのにさばかれなかった人、このみことばは答えをくれます。「すべての罪人は必ずさばかれる」と。神のさばきは必ずあり、それを免れる者はだれひとりいないのです。ですから、パウロは6節で、さばきは必ず起こるし、そのさばきはすべての罪人に対して起こるものだということを教えるのです。

クリスチャンに対してもさばきが約束されています。それは罪のさばきではなくて、クリスチャンとして主に従ってきた、その信仰者としての生き様に対する神からの褒美をいただく、そのときです。すべての人間が神の前に立つということは、みことばが教え、ある者にはその罪のさばきが、ある者にはその働きに対する褒美が与えられる。そのことを実はこれからパウロが私たちに教えてくれるわけです。

3) 二種類の人々と二種類のさばき

必ずさばきが来るのだということを教えたパウロは、そのさばきについてもう少し説明を加えて行きます。7節から先ずパウロは、人類には二種類の人たちがいるということを言います。クリスチャンとそうでない人たちです。キリスト者と反キリスト者とした方がいいと思います。なぜなら、見て来ているように、反キリスト者はキリストに対して自らの意志をもって逆らい続けているからです。知っていながら彼らは自分の意志をもって神に逆らっているのです。

(1) キリスト者

7節「**忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求める者には、永遠のいのちを与え、**」、永遠のいのちが約束されている人々、それがキリスト者です。このみことばを見るとこのようにも取れます。永遠のいのちを得るためには「**忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものを求め**」なければいけない、そのようにする人には永遠のいのちが与えられると、このように誤解を生むかもしれません。このような働きをしなければ救われないのではないのか、罪が赦されないのではないのか、永遠のいのちをいただくことがないのではないかと。しかし、パウロはここで救われる条件を話しているわけではありません。永遠のいのちを得るための条件を話しているのではないのです。パウロが言っていることは、救われている人たち、クリスチャンたち、キリスト者の特徴です。つまり、救われている人、永遠のいのちをもっている人たちはこのように生きる人たちだと言うのです。その特徴として四つのことが挙がっています。

◎永遠のいのちをもつ人の特徴

a) 忍耐をもって善を行ない続ける人

そのように生きるからその人は救われているということが明らかになるのです。「**忍耐をもって善を行なう**」人、つまり、どんなときでも主に対して正しいこと、主が喜んでくださることを行なって行こうとする人たちです。「**忍耐**」とは「耐え忍ぶ」ということです。レオン・モーリスという神学者は「このことばは激しい戦いの中、いかなることがあっても落胆せずに戦い続ける兵士に対して用いられることばである」と言います。戦場でその戦況が劣勢に陥ろうと勇気を持って前に進み続けて行こうとする、敵の攻撃に対してひるむことなく前進して行こうとする、落胆するような経験をしてでも戦いを止めることなく、益々前進して戦いを継続して行こうとする、そのような兵士の姿、その意味を持ったことばだと言います。ジョン・カルヴィンはこのように言っています。「この忍耐によって、彼らは様々な試みによって圧せられながらも、なお、堅く立ち続けるからである。というのは、サタンは彼らを妨げる無数のつまづきを置いて、彼らの歩みを抄らせまいとし、彼らを正しい道筋から踏み外させようとして懸命になっているからである。」と。つまり、サタンは多くのクリスチャンたちがもう救われてしまったから、それに対してはもうどうすることもできないので、クリスチャンに対して、歩むべき道から外れるように、そこから離れるようにと様々な妨げを置こうとするのです。クリスチャンを弱らせようとするのです。サタンが喜ぶクリスチャンはいつも不平不満があり、神を疑い、喜びがなく、感謝もなく、みじめで、人を中傷し、そのように歩む人です。なぜなら、キリストの栄光がまったく現われないからです。私たちがこのような誘惑に敗北するとき、サタンのせいにはできません。なぜなら、誘惑を受けても最終的な選択は私たち自身からです。パウロが教えることは、本当に救われている人、罪が赦されている人、永遠のいのちをいただいでい

る人、本当のクリスチャンは失敗しない人ではない、すべてのことに完璧な人でもない、大変な困難があっても、周りの人々が反対しようと、理解してくれないことがあっても、その中にあって、神の前に喜ばれることを忍耐をもって継続しながら、失敗したらそれを悔い改めて、神の前に正しく歩み続けて行こうとする、そのように兵士のような者であるということです。それがクリスチャンだと言うのです。

考えてみてください。私たちが立ちどまって夜空を見上げて、月を見てはっとするのは新月ではありません。新月の月なんてどこにあるかもわからないし気にも留めません。でも、すばらしい満月が私たちの前にあれば、思わず立ち止まって「きれいだな！」と言います。太陽の光を反射しているのです。私たちクリスチャンも神の栄光を輝かせていない新月のような存在であったら、世の中の人々が見ても何の魅力も感じません。しかし、キリストの栄光を輝かせている、丁度、満月のような存在であるなら、人々の前でこのすばらしい光、神のすばらしさを明らかにできるのです。ヨハネはヨハネの手紙第三11節で「**愛する者よ。悪を見ならわないうで、善を見ならいなさい。善を行なう者は神から出た者であり、悪を行なう者は神を見たことのない者です。**」と言っています。

b) 主の栄光を求めて生きる人

二つ目の特徴、7節に「**栄光**」と記されています。救われている人は主の栄光を求めて生きる、つまり、主の栄光を現わすことを目標に今を生きる人です。クリスチャンはどんなときにも神の栄光を現わすことを目標に今日を生きている人たちです。明日そのように生きましようと言っているのではないのです。今日そのように生きて行きましよう、それがクリスチャンの生きる目標だからです。私たちが待ち望んでいること、私たちはいつかこの罪のからだから解放されるときがやって来ます。もう罪を犯すことも、神を悲しませることもないのです。イエスにお会いするときにそのような栄光のからだをいただくことが約束されています。しかし、その日まで、私たちのうちに内在している聖霊は、私たちがキリストに似た者へと変えて行こうとします。キリストの栄光を輝かせようと、そのような働きを始めているということは皆さんよくご存じです。でも、先ほど見たように、サタンはそのような働きが私たちのうちに為されて、私たちがキリストの証をして行くことを望みません。私たちが救われたのはこの方のすばらしさを世に明らかにして行くためです。そのために神は私たちが救ってくださったのです。ですから、当然クリスチャンが目標としていること、クリスチャンがいつも望んでいることは、私のような罪深い者をその罪から救い出してくださったその神のすばらしさを世に証することです。そのように神の栄光が現わされて行くため、私たちは自らを聖め続けて行くことが必要です。私たちからそのような栄光を奪って行くのは、私たちのうちに働いている神の栄光を輝かせようとしないのは、私たちのうちに潜む罪です。罪を犯している人は神の栄光を現わすことがない、だから、私たちは自らの罪を神の前に告白しながら主に従うことによって神に用いていただくのです。

パウロはIコリント6：20で「**あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。**」と言いました。そのように生きるのだ、私はもう神のものであり、神が私を買い取ってくださった、だから、私が生きている目的はこの神のすばらしさを世に証するためであると、そのような願いをもって今日を生きている人々、それがクリスチャンである、それが永遠のいのちをいただいている人だとパウロは言うのです。

c) 誉れを求めて生きる人

三つ目にクリスチャンの特徴をこのように言います。「**誉れ**」と7節に記されていることば、これは「評価する」ということばから来ています。もちろん、人間の評価のことではありません。クリスチャンは人から賞賛されること、人からほめられることを求めて生きるものではありません。神からほめられること、それを望みながら生きて行く人たちです。神に従って神に喜ばれることをして行くとき、世の中の人々は歓迎してくれません。神を知らない人たちが歓迎しようとしまいと、それよりも大切なことは、私たちの主が喜んでくださるかどうかです。ですから、本当のクリスチャンはそのように神が喜びほめてくださること、そのことを願って歩む人たちです。パウロはテサロニケ人への手紙の中でテサロニケの教会の人たちに対してこのように言います。Iテサロニケ2：4「**私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです。**」と、福音宣教のことを言います。彼の動機は神が喜んでくださればよい、そのためにパウロはその働きをしていると言います。Iコリント4：5ではパウロはこのようなことを教えています。「**ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。**」、つまり、パウロは人々がどう思うかということには気にしなくても良い、私たちの心の中のをすべてをご覧になっている神が正しい評価をくださるから、あなたをほめてくれると言うのです。私たちク

リスマンがしっかり覚えるべきことは、神の前に私たちが立ったときに神が何と言われるかです。「よくやった、良い忠実なしもべだ」と言ってくださるのか、それとも「不忠実だった」と言われるのか？「忠実」というのは神が言われることに自分がどのように思おうと従おうとすることです。クリスマンの妨げは、神がそのように言われていても私は私のやりたいことをするというものです。いつか私たちは例外なく神の前に立ちます。未信者はさばきのために立ちます。クリスマンは神からほうびをもらうために立ちます。そのときに、神は私たちに何と言われるか？神が評価して下さる、神が喜んで下さるように、神が称賛を与えて下さるように、そのことを目標にしながら歩み続けて行く、それがクリスマンです。人はあなたを誤解するかもしれない、でも、あなたの心のすべてを見ておられる神は、あなたに正しい評価を与えてくれます。あなたが一生懸命に仕えていてもだれも見えていないかもしれない、でも、神は見ておられます。あなたが正しい動機をもって主を証している、人々はそれを見て煙たく思うかもしれませんが、でも、神はそれをご覧になっていて、そのあなたの働きに対してふさわしい報いを与えて下さる、それをほめて下さると言うのです。

d) 不滅のものを求めて生きる人

クリスマンとはどういう人か、「**忍耐をもって善を行なう**」人であり、「**栄光**」を求めて生きる人であり、「**誉れ**」を求めて生きる人であり、そして四つ目に「**不滅のものを求める者**」であるとパウロは言います。「**不滅のもの**」、このことばはIコリント15章で何度も使われています。42節、50節、53節、54節に、そこには「朽ちるもの」と「朽ちないもの」と記されています。私たちのからだは朽ちるものです。死んで行くものです。その死んでいくからだは死ぬことのない栄光のからだへと変えられて行くというのです。私たちが新しいからだをいただく、よみがえりのからだ、そのことについてこのことばは用いられているのです。つまり、よみがえったからだはもう滅びることがないからです。死ぬことがない、その新しいからだのことです。感謝なことに、私たちに神が約束して下さったからだはもう罪を犯すことがないし、老いることもないし、病を経験することもなく、そのようなよみがえりのすばらしいからだです。

同時にまた、この「**不滅のもの**」というのは聖書の中を見て行くと、「**新しい天と新しい地**」に関しても言われています。この天と地は滅びるとイエスは言われました。確かに、今の地球を見ると、神が言われたように間違いなく滅びへと向かっています。でも、神が造られる新しい天と新しい地に関しては滅びることがないのです。そこで、この7節の最後でパウロが言う「**不滅のものを求める**」とはどういう人かということ、それは天国を見据えて今を生きる人です。今の自分の周りのことだけしか見て生きているのではないのです。常にその先を見ているのです。永遠を見ているのです。キリストにお会いするときのことを見ているのです。栄光のからだは与えられるその日を楽しみにしながら待っているし、クリスマンに約束された新しい天新しい地に神によって招き入れられることを待っているのです。私たちは天にあって神とともに永遠を過ごすことができる、それだけでもすばらしい約束です。ですから、クリスマンはそのことを楽しみに歩む人たちだとパウロは言うのです。そこに私たちの希望があるのです。私たちは今この罪のからだの中にあつて日々葛藤があります。神に喜ばれることをしたいと思っても、それをしていない私たち。しかし、このからだから解放される日がやって来ます。神を悲しませることのない、そのような新しい栄光のからだをいただいて、そして、滅びる世ではなく、滅びない永遠に続く新天新地において、私たちは神とともに永遠を過ごすことができるのです。そのことを思いながら歩んでいる人々、それがクリスマン、それが永遠のいのちをいただいている人たちだとパウロは教えてくれるのです。これがパウロがこの7節で言わんとしたことです。永遠のいのちを与えると。

◎永遠のいのちとは？

「永遠のいのち」というと私たちは終わることのないいのちを過ごして行くと、その時間だけを考えてしまうかもしれませんが。1年でもないし100年でもない、1000年、億年でもない、ずーっと、なぜなら、残念なことに私たちは今時間の中に生きているからです。「永遠に生きる」、「終わることがない」、「死ぬことがない」、ある人は「永遠にいったい何をするのですか？」と言うかもしれませんが。でも、私たちが考えなければいけないことは、その時間のことよりもっと大切なことです。みことばが私たちに教えてくれるのは、長さではなくその永遠の生活の質、内容のことです。それは「神とともに過ごす」そのすばらしさです。神とともに過ごすということがどんなにすばらしいことかということ。天国で神とともに過ごすことがどんなにすばらしいことなのか、そのことを私たちに教えてくれるのです。

◎天で神とともに過ごすことがなぜすばらしいのか？

a) 最上の喜びがあるから

そこには最上の喜び、比較できない喜びがあるからです。詩篇の著者はこのように言います。16:11「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」と、ですから、その方とともに歩むことによって、私たちもその喜びを味わうことができるのです。この地上の何ものをもっても絶対に得ることのできない喜びです。物は喜びをもたらしません。私たちが考えることは、自分の必要なもの、欲しいものが手に入れば私たちは喜ぶと思えます。確かに、そこには一時的な喜びがありますが、その喜びは日に日に薄れて行きます。自分の思い通りに物事が進めばきっと私の心は喜びに満たされるに違いないと思えます。確かに、一時的にはそうです。でもすぐに、私たちの心の中には不満が出て来ます。物があってもなくても、自分の思い通りに物事が進もうと進むまいと、私たちの心が喜びで満たされる、それは可能なことです。それを可能にしてくださるのは私たちの創造主である神だけです。人間が喜びを持たないのは、その喜びの源である神に対して心を開こうとしないし、その神のところに行こうとしないからです。だから、私たちが神のもとに行くときに私たちは最上の至福の喜びを持って歩み続けることができるのです。なぜなら、喜びの源である神とともに私たちは永遠を過ごせるからです。本当の喜びは神しか与えることができません。私たちも経験します。クリスチャンとしてこの地上を歩むとき、本当に心が喜びに満たされているときがあります。それは神とともに歩んでいるときです。神のことに感謝しているとき、神の恵みを心から称えているときに、だれかから強制されたからではない喜びが湧き上がって来ます。私たちはそのようなことを何度も経験しています。しかし同時に、何度もその喜びを失う経験もしています。なぜ失うのか？神から心が離れてしまうからです。心配しなくてもいいのです。私たちが神のところに行くならその喜びを神からいただき、それを喜びながら歩むことができるのです。詩篇43:4にも「こうして、私は神の祭壇、私の最も喜びとする神のみもとに行き、立琴に合わせ、あなたをほめたたえましょう。神よ。私の神よ。」とあります。もし、クリスチャンがこのことを経験していないなら悲しいことです。私たち人間にとって一番の喜びを得るところは私たちに造ってくださった神のもとです。だから、私たちはその日を待望するのです。

b) 最上の幸せがある

二つ目に、そこには最上の幸せがあります。詩篇73:28でアサフは「しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。…」と言っています。私たちは幸せになりたいと思っていますが、見るところ、探すところが間違っているのです。本当の幸せをくださる神のところに行こうとしないで自分で一生懸命幸せを見つけようとするから、私たちはいつまで経っても見つけられないというのです。なぜなら、私たちはだれ一人何が幸せか分かっていないからです。私たちが思う幸せとは、私たちの願いがかなうこと、私の思い通りに物事が進んで行くことと、そのように幸せの定義作りをしますが、それは非常に利己的です。神が私たちに教えてくださるのは、あなたの心の空洞を満たしてくれるのは神しかいない、どんなに物が豊かになってもあなたの心はそれによって満たされることはないということです。一番大切なものを忘れているのです。それは私たちに造ってくれた神です。そこに帰らない限り、私たちが本当の満たしを経験することはないのです。だから、このアサフは「神の近くにいることが、しあわせなのです。」と言うのです。神とともに歩んでいること、それで十分なのです。物がなくても、自分の思い通りに事が進まなくても、また、大変な苦しみの中で、悲しみの中で、神が私の味方であり神が私とともにいてくださるといふこの思いがどれほど皆さんの心を励まして来たことでしょうか？ですから、私たちが神のもとに上がることがどんなにすばらしいことか、そこにあつて私たちはこの神の幸せを経験しながら歩み続けることができるからです。

c) 神の祝福がある

三つ目に、そこには神のすばらしい祝福があります。黙示録7:16-17でヨハネはこのように言っています。「彼らはもはや、飢えることもなく、渇くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。:17 なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」、神の豊かな祝福があるのです。そこでは、もう私たちは飢えることも渇くこともない、どんな苦しみも私たちに打つことがない、私たちの目から涙をぬぐい取ってくださると。そこに約束されているのは神の祝福です。

d) 神との完全な交わりがある

また、私たちが天に上がり神とお会いするとき、私たちは神とのすばらしい完全な交わりを経験します。イエスはヨハネの福音書17章、「主の祈り」の中でこんなことを言われました。17:3「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」と。ここで言われていることは「永遠のいのちを得るためにはどうすればいいのか」ということです。それは、すべての創造主であ

る父なる神と、そして、その方によって遣わされた救い主イエス・キリストを信じることです。ですから、「知る」ということばを使っているのです。その神と個人的な関係を築くことです。それによって、永遠のいのち、救いをいただくのだとみことばは教えてくれます。同時に、その交わりをいただいた私たちは神と常に交わりを保ちながら歩むことができ、天にあっても神と親しい交わりをもち続けて行くことができるのです。その交わりは完全なものです。なぜなら、私たちはイエス・キリストの御顔を拝して、その方と交わりができるからです。その方と語ることができるからです。しかし、今、この地上にあっても、神はこの聖書のみことばを通して私たち一人ひとりに語ってくださるし、私たちはその全能、全知の神に祈りをもって語ることができるのです。このようなすばらしい神との関係、交わりを私たちは経験することができるのです。

e) 完全な礼拝をささげることができる

そして、もう一つ、私たちが天に行くときに、私たちはやっとなら神にふさわしい完全な礼拝をささげることができるのです。確かに、今、この地上においても私たちは神を礼拝しながら歩んでいます。なぜなら、私たちクリスチャンは神を礼拝する者として救われたからです。こうして週の初めの日にともに集って礼拝するだけではありません。ここから帰って、それぞれ職場へ学校へと行きますが、どこに行っても神を礼拝しながら生きるわけです。しかし、それは不完全なものです。皆さんは神を礼拝するためにここに来られた、でも、そういうことを毎週繰り返しているうちに、ここに来る目的が何であったかを忘れてしまうのです。ある人は「こうして礼拝に来ることができたことを感謝します」と言うかもしれません。もちろんそうです。でも、それが目的ならあなたは礼拝していないのです。礼拝に来るのは心から神をあがめるためです。病気でここに来ることができなくても心からの礼拝をささげることができるのです。この場所に来ることは大切ですが、この場所に来ることがあなたの礼拝の目的なら、あなたは見るところを間違っているのです。あなたはどのような思いを持って集って来ますか？残念ながら、私たちはこうして礼拝をしてもいろいろな思いが心に入ってきます。正しい動機で集まって来たとしても、それを持ち続けながら過ごしているかどうかは疑問です。私たちが神に最高のものをささげようとするのであれば、私たちは前日どのように夜を過ごすかということを考えなければいけません。寝不足だったら私たちは集中して神のことばを聞くことができません。明日大切な人に会う予定があるなら、私たちはその人が大切であればあるほど前日ゆっくり休息を取ろうとします。総理大臣であろうと、大統領であろうと、だれであろうと、その人が重要な人物であればあるほどそのように気をつけます。そのような人よりはるかに重要な神に会いに出て来るのです。——ここに神がいるわけではありませんが敢えてそのように表現します——ともに神を礼拝するために集って来るこの公同の礼拝の時間、それはあなたの礼拝、ささげ物なのです。しかし、私たちが捧げている礼拝は不完全なのです。

でも、神のもとに上がったなら、私たちはこの罪のからだから解放されて、神の前に完全な礼拝、神を心からあがめることができるのです。神にふさわしい礼拝を私たちはささげることができるのです。そこにあつては、雑念などありません。からだの疲れもありません。睡魔が襲うこともありません。私たちが一番望んでいることは、礼拝者であれば、信仰者であれば、この神を心からあがめることです。それが可能になるのです。黙示録4章、5章に天におけるその礼拝の姿が記されています。4：8－11「この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。」：9 また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、：10 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。：11 「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」、5：8－14「彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっばいはいった金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。：9 彼らは、新しい歌を歌って言った。「あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、：10 私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」：11 また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。：12 彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」：13 また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。：14 また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。」

そのことを考えるとき、私たちは一日も早くその神のもとに上がりたいと思いませんか？そこには最高の喜び

があり、最高の幸せがあり、最高の祝福があり、最高の交わりがあり、そして、この神を私たちは心から正しく完全に礼拝することができるのです。そのときが待ち遠しいです。私たちはどちらかという、早くこの苦しみから解放されたいと思って天を待ち望んでいるかもしれませんが、神が約束してくださった天はまったく違うところです。このようなすばらしい祝福を神は私たちに約束してくださったのです。イエス・キリストを信じる者にこのような約束が与えられたのです。そして、救われているのかどうかは今見てきたように、これら四つのことを見ることによって明らかになるのです。

(2) 反キリスト者

7節でこのような祝福が約束されていると教えたパウロは、8節で今度は「反キリスト者」のことを教えます。彼は「**党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。**」と、このような人たちであると言います。キリスト者にはすばらしい永遠のいのちが約束されていました。でも、「反キリスト者」には「**怒りと憤り**」が約束されていると。ここにも救われていない人の特徴が記されています。

◎救われていない人の特徴

a) 党派心をもつ

この「**党派心**」ということばは新約聖書には7回出て来ますが、日本語の聖書ではすべて「**党派心**」とは訳されていません。4回は「**党派心**」ですが、ピリピ人への手紙の2：3では「**自己中心**」と訳されています。「**何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。**」と、聖書のこの箇所
の欄外のところに「**自己中心**」と記されています。また、ヤコブ3：14、16を見ると「**敵対心**」と訳されています。「**14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。**」「**16 ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。**」、この「**党派心**」ということばは、分裂・分派を作るという意味より、「**利己的野心、利己的願望**」のことです。利己的なもうけのために外へ出て行って仕事をする人のことです。商人が他人のことを全く考えずに自分のことだけ考え、ただ金儲けのためだけに働く、そのようなことです。それを「**党派心**」と訳しているのです。どんなに人に迷惑かけても構わない、自分さえよければいい、ただ金儲けのために働いている人、そして、この人は神よりもこの世のこと、この世のものを愛して歩んでいる人です。イエスのたとえの中で「**種まき**」の話があります。マタイの福音書13章です。四つの地に蒔かれた種、その中でいばらの中に蒔かれた種のことを思い出してください。13：22「**また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の感わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。**」と、みことばを聞いて喜んでいるかもしれないけれど、彼らの関心は神のことよりも「**この世の心づかいと富の感わし**」である、だから、実を結ばない、すなわち、救われていないのです。なぜなら、その人には神よりもそれ以外のことが大切だったからです。また、マタイ6：24にも「**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。**」とあります。神に仕えるか、富に仕えるか、どちらかだと言うのです。あなたの主人は何か、あなたはなに仕えているのかと。ここで言われている「**党派心**」をもっている人々というのは、神よりも富に仕えようとしている人々のことです。彼の関心は神ではありません。神に、聖書に興味をもっている、彼らの心は神に向いていないのです。

もう一つ見ていただきたいのは、「**党派心を持ち**」、「**持ち**」ということばです。これは「**～から**」という前置詞が使われているのですが、「**ある源から起こる、出て来る**」という意味です。あることの源、原因、起源を表わす前置詞です。つまり、パウロが言いたいことは、このような世を愛するという行動、神よりも神以外のものを愛する行動が出て来るのは、その人の内にその行動を生み出す原因があるからだということ。私たちが何度も見ているように、罪が起こるのはその心が悪いからです。私たちがその行動を変えようとしても心が変わらなければどうにもなりません。心が汚れているから、心に罪があるから汚れたことや罪を行ってしまうのです。パウロはそのことを言うのです。このように神よりも世を愛する人たちの原因は心にあるということ。その心が神に対して閉ざされていて、世に傾いているから、その人から生まれてくる行動はこのように自分のことを中心に歩むものだと言うのです。

b) 真理に従わない

二つ目にその人は「**真理に従わない**」人だと言います。そのような心をもっているから神の命令に従おうとはせず、自分の好きなように生きているのです。

c) 不義に従う

そして三つ目に「**不義に従う**」、つまり、義に逆らうということ。神が喜ばれる正しいことに逆らうのです。

神が忌み嫌われることを愛して、それを選択するということです。ローマ1：18にそのことが出て来ました。

「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」と。罪人の問題は神よりも罪を愛し罪を選択していることです。神の前に正しいことをしようとしないうのです。したくないのです。関心がないのです。なぜなら、彼らの心は不義に傾いているからです。だから、その人々には神の審判が下るのです。それは**「怒りと憤り」**だと言います。**「怒り」**とは「抑制されない、軽減されない」神の怒りです。これまでに見て来たように、罪人の罪に対して神は情けをかけないと言うのです。また、**「憤り」**は「激情、激怒」ということです。この怒りの厳しさを表わしたことばです。つまり、私たちが覚えなければいけないことは、このような神に逆らい続けるといふ罪の行ないに対して、神は決して喜んでおられない、神はそれに対して怒りを持っておられるということです。そして、その救いのチャンスを逃してしまうなら、その人に待っているのは容赦ない神のさばきです。

7節に神は**「永遠のいのちを与える」**とあります。8節には**「怒りと憤りを下される」**とあります。8節の**「下される」**という動詞は補われていることばです。神は信じる者に**「永遠のいのち」**を与えられますが、**「怒りと憤り」**は罪人が受けるにふさわしいものであって、神が喜んで与えるものではないと言っているのです。それは神に逆らっている人々が自らの選択によって選び取ったものだというのです。ですから、神は決して罪人が滅ぶことを喜んでおられません。なぜなら、神は常にすべての罪人に救いのチャンスを与えておられるからです。実は、神は今もあなたに救いのチャンスを与えてくださっているのです。あなたのすべての罪を神はご存じです。そして、その罪を神は赦そうと言ってください。その罪の赦しを神は与えられるのです。神は救いを備えてくださいました。イエス・キリストはあなたの身代わりに十字架で死に、約束通り三日後によみがえってくださいました。あなたの罪の代価を支払われたのです。しかし、あなたの大きな罪は、その救いを見下していることです。私には必要ないと言っていることです。だから、神はあなたが選択したそのさばきをあなた自身がその身に招くことを良しとされるのです。あなたがそれを望んだからです。

今日、私たちが見てきたことは、ある人たちには神は永遠のいのちを与えてくださる、なぜなら、その人たちは、忍耐をもって善を行なって行こう、人が何と言おうと神の喜ばれることをし、神の栄光を現わすために生き、神の称賛を得るために生き、そして、天国を覚えながら今日をしっかり生きようとする、そのような生き方をしているからです。かたや、神に逆らい続け、党派心を持ち、神のことより自分のことを優先し、神の真理に従わないでそれに逆らい、そして、神が忌み嫌われる不義を行なっている人たち、なぜ、神はキリスト者にこのような祝福をくださるのか、反キリスト者にこのような怒りを示されるのか明らかです。

まだイエス・キリストを信じておられない皆さん、救いがあるのです。救いを拒まないでください。神が与えようとしてくださっている救いをぜひ受け入れて、このすばらしい赦しを、この永遠の約束を、今日ご自分のものとしてください。クリスチャンの皆さん、クリスチャンはこのように生きるのだとみことばが教えてくれました。そのように歩んでおられますか？忍耐をもって神の前に善を行ない続けてください。なぜなら、それによってキリストの栄光が現わされて行くからです。そのような生き方をもって神のすばらしさを証して行きたいではありませんか！そのように歩み続けてください。神が私たちをこの地上に置いてくださる限り……。